

Ⅱ. まちの将来像とフレーム

1. まちの将来像の設定

1-1 まちづくりの理念

本市のまちづくりに関する現況・課題、まちづくりの潮流や資源などを踏まえるとともに、あきる野市総合計画や、都市計画マスタープラン改定のため開催したまちづくり懇談会での意見等を反映し、まちづくりの理念を次のように設定します。

● 将来の都市政策に大きな影響を及ぼす課題の解決

人口減少・少子高齢化の進行や、それに伴う空き家の増加、施設需要の減少、中心市街地の空洞化といった課題に対応し、安全・安心で住みやすいまちづくりを進めます。

● 地域資源を活用したブランド力の高いまちづくり

本市には豊かな自然環境等の地域資源があり、そのポテンシャルを生かして、持続性のある高いブランド力を持ったまちづくりを進めます。

● 地域特性を生かした都市機能の向上

広域交通基盤（鉄道、高速道路）等の地域特性を生かし、集約型地域構造の形成のため、駅等を拠点とした都市機能の集積を促進し、それらを支える都市基盤の充実等により、生活の利便性や産業環境の都市機能向上を図ります。

● 市民のニーズや住民参画に対応した地域づくり

既存の都市ストックを十分に活用するとともに、市民ニーズに的確に対応するため、まちづくりにおける様々な局面で市民の主体的な参画を促進し、効率的・効果的なまちづくりを進めます。

● 他施策と連携した都市づくり

人口減少・少子高齢化を背景とし、都市づくりにおける投資余力の減少の恐れがある中で、都市計画マスタープランを実効性のあるものにするため、都市づくりの分野だけでなく、市の関連施策との整合、他分野の施策への要請や国・東京都などの動向にも留意します。

1-2 まちづくりの将来像

まちづくりの理念、あきる野市総合計画の将来都市像、市民意向（懇談会意見）を踏まえ、都市計画マスタープランにおける、まちの「将来像」を次のようにとりまとめました。

人・地域・自然とのつながりを大切にし、 安心して住み続けられるまち・あきる野

人と人、人と地域（地域性）、人と自然が密接に関連し、まちづくりにおいて、これらのつながりが大切にされるとともに、活力や安全・安心が確保され、暮らしやすく住み続けられるまちを目指します。

コラム◆社会や都市の変化

近年、大規模な自然災害の発生や新型コロナウイルス感染症の蔓延など、私たちが都市生活を営んでいく上でのリスクが増大しています。これらの脅威に対して、被害を防止する基盤整備やまちづくりの強化は不可欠ですが、さらに、これまでの暮らしや都市活動の在り方にも影響を及ぼしつつあることを考慮していく必要があります。

例えば、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を契機として、在宅勤務や遠隔地でのリモートワークといった新たな働き方や住まい方の普及は、従来のように、多くの人が働く場所である都心と、そこに通勤する人が住む、本市のような郊外都市の関係や役割分担に変化を生み、都市構造や土地利用といった将来の都市のあり方に影響を及ぼす可能性があります。また、IoT・ビッグデータ・AIなどの技術革新も、都市や暮らし方の変化を加速していくと考えられます。

1-3 まちづくりの目標

まちづくりの理念と将来像を実現するため、まちづくりとして目指す姿（まちづくりの目標）を以下のように設定します。

● 本格的に進む少子高齢化に対応した住み続けられるまち

- ・ 駅周辺の機能強化や公共交通の充実を見据えた土地利用の対応や適切な誘導
- ・ 都市機能の拠点集約による都市の活力の向上
- ・ 継続的な居住意向に応えられる職住近接のまちづくり
- ・ 既存ストック等の活用による地域コミュニティの創出の促進
- ・ 市街地の空洞化（空き家・空き店舗など）への対応



● 広域交通・都市交通基盤などを生かした活力のあるまち

- ・ 圏央道インターチェンジによる広域環状機能を生かした産業機能の向上
- ・ 低・未利用地を生かした計画的な土地利用誘導（秋留台地中心市街地における市街地形成）
- ・ 既存の地域公共交通の充実を生かしたまちなみの誘導



● 自然環境が保全され身近な緑が充実したまち

- ・ 開発抑制を行うことによる、豊かな自然環境の保全
- ・ 丘陵地の緑の保全や親水空間の創出
- ・ 生産緑地による市街地の緑の充実・農地の保全



● 安全・安心が強化されたまち

- ・ 建築物の耐震化等の促進による災害に強いまちづくり
- ・ 災害に強い都市構造・土地利用
- ・ 大規模災害発生に備えた都市構造の強靱化



● 市民参画による協働のまち

- ・ まちづくりに関する情報発信による市民の参画意識の向上
- ・ 市民のまちづくりへの参画機会の拡大
- ・ 幅広い市民の声を集めることによる実現化方策の充実



2. 将来フレーム

2-1 将来フレーム

令和22年（2040年）の人口推計（国立社会保障・人口問題研究所）でも示されているように、将来人口は減少し、少子高齢化が進行することは明らかです。まちづくりにおいては、この人口減少・少子高齢化を前提とした計画づくりを行っていきます。

都市計画マスタープランの将来人口フレームは、上位計画である東京都の「都市計画区域の整備、開発及び保全の方針」の将来人口フレーム※と同様とします。

※東京都の「都市計画区域の整備、開発及び保全の方針」では、令和12年（2030年）の将来人口は80,692人（保留フレームに対応する人口を含む）としています。

実績¹：80,292人（令和2年（2020年））

	令和12年（2030年）	令和22年（2040年）
推計 ²	75,496人	70,369人
人口フレーム ³	80,692人	—

■ 将来人口フレーム

〔留意事項〕

- 1：住民基本台帳に基づく実績
- 2：推計は国立社会保障・人口問題研究所推計値（平成30年（2018年）推計）
- 3：東京都「都市計画区域の整備、開発及び保全の方針」の将来人口フレーム

コラム◆SDGsとの関連

SDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）とは、2015年9月開催の国連サミットにおいて全会一致で採択された、2030年までに達成すべき国際目標です。国際社会共通の目標として、持続可能な世界を実現するための包括的な17のゴール（目標）が定められています。

都市づくりにおいても、その実現に向け目標を持って取り組むことが求められており、都市計画マスタープランのまちづくりの目標や各方針の実現において、SDGsの目標・ターゲットとの関連を意識することが重要です。



3. 将来都市構造

3-1 将来都市構造の考え方

人口減少社会においては、地域特性に応じて拠点等に再編・集約し、交通基盤により連携する集約型の地域構造としていくことが必要であり、市民の生活を支える様々な都市機能や居住機能を充実していくことが求められています。

このため、都市の広域的な結びつき等も考慮し、拠点や軸を設定した将来都市構造を設定します。都市構造は、都市の骨格を形づくるための概念であり、これに即して、土地利用誘導や都市づくりの各分野の整備を進めていきます。

都市構造は、交通の結節点として都市機能が集積する「拠点」と、これら拠点を連携させ、拠点間のアクセス、拠点間の役割分担を可能とする、基幹的な交通ネットワークとその沿線に諸機能の集積や機能の連担を図る骨格的な「軸」を位置付けます。

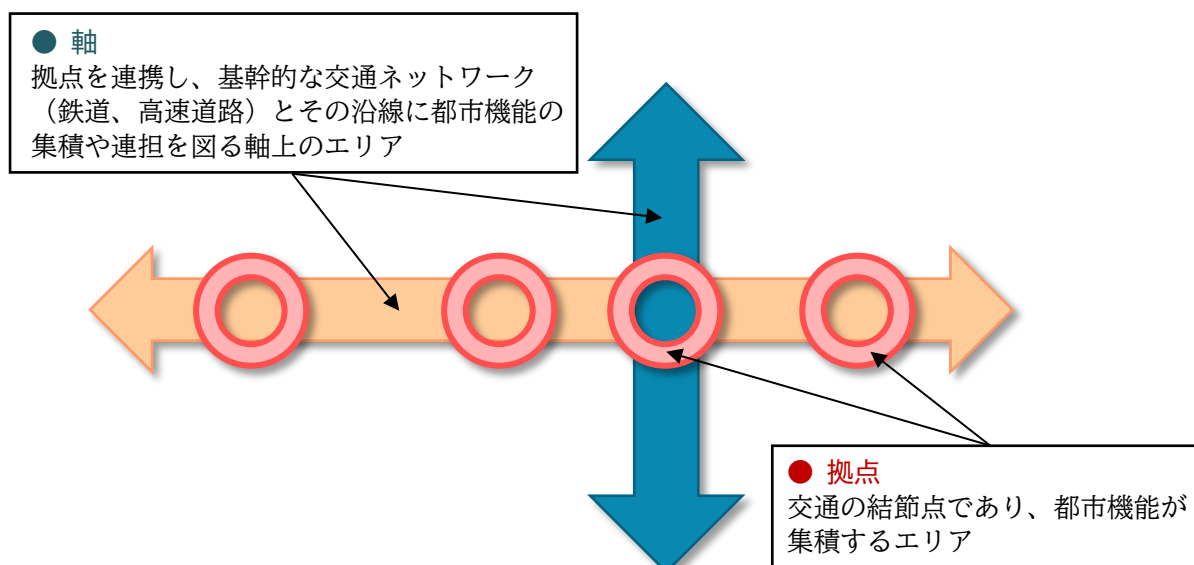
設定に当たっては、下記のような考え方を基本とします。

● 都市の骨格的な構造の維持

これまでの都市計画に位置付けられている都市軸、広域交通基盤や既存の拠点といった骨格的な都市構造を維持するとともに、更なる市内の回遊性や周辺自治体との連携を強めます。

● 隣接する拠点との結びつきの活用

人の動きが市内外に広がっている現状や広域交通基盤等の状況を踏まえ、これらを活用し、隣接する他自治体の拠点との結びつきを生かすことにより、市民の暮らしやすさや観光客を引き付ける力を強化する都市構造とします。



■ 「軸」と「拠点」の概念図

3-2 拠点の構成

(1) 交流拠点

● 秋川駅周辺

秋川駅周辺は本市の中心的な商業、業務の核として、商業・業務施設の充実を図ります。また、広域から人を集める文化レクリエーション機能の核として、市内外の人が集うにぎわいと活気のある機能集積と空間づくりを進め、文化や生活情報発信の場の形成を図ります。



秋川駅前

● 武蔵五日市駅周辺

武蔵五日市駅前から檜原街道沿道は、かつての「市」が開かれた歴史を踏まえ、街並みや歴史的背景を生かし、商業の集積、活性化を図ります。また、秋川渓谷や秩父多摩甲斐国立公園などの首都圏有数の自然環境豊かな観光レクリエーションゾーンの玄関口として、訪れる人々にとっても便利で魅力的な商業等の機能集積を図ります。

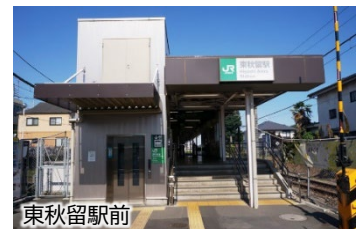


武蔵五日市駅前

(2) 生活拠点

● 東秋留駅周辺

東秋留駅周辺は、駅周辺の歩きやすく安全な生活道路の整備、沿道の緑化や北側の商店街の充実など、日常的な暮らしに必要な都市機能の充実を図ります。



東秋留駅前

● 武蔵引田駅周辺

武蔵引田駅周辺では、駅近接の利便性を生かし、職住近接による住・商・工・農のバランスの取れた利便性の高い産業系複合市街地の形成を進めます。また、武蔵引田駅北口地区では、秋川高校跡地周辺の産業系の市街地整備と連携するとともに、駅前広場や道路・公園などの都市基盤の整備を進めます。



武蔵引田駅前

● 武蔵増戸駅周辺

武蔵増戸駅北口地区は、基盤整備、産業の活性化や良好な住環境が共存する複合的な土地利用による拠点性の向上を図ります。

武蔵増戸駅南口地区は、歩きやすく安全な生活道路の整備や商店街の充実など、日常的な暮らしに必要な都市機能の充実を図ります。



武蔵増戸駅前

(3) 産業拠点

● 秋川高校跡地周辺

秋川高校跡地周辺から武蔵引田駅周辺地区までの区域は、圏央道日の出インターチェンジに近接する高い交通利便性を生かし、本市の中核的な産業拠点として、雇用の創出、地域経済の拡大及び流入人口の誘導などに向けた、産業の集積や多様なイノベーション創出が進む拠点の形成を図ります。



(4) 観光レクリエーション拠点

● 十里木・長岳

「秋川渓谷瀬音の湯」を中心とした観光レクリエーションの拠点として、地域の経済やコミュニティの活性化につながる景観の整備や観光レクリエーション関連機能の集積を図ります。



(5) 緑と憩いの拠点

秋留台公園、草花公園、小峰公園、網代緑地及び金比羅山周辺を市民の憩いとレクリエーションの場となる緑と憩いの拠点として位置付け、身近に緑とふれあうことができる場として、地域と調和した整備について東京都と連携を図ります。



3-3 軸の構成

(1) 都市軸

本市を東西に貫くJR五日市線、秋3・3・3号新五日市街道線（五日市街道、檜原街道）により、秋川駅周辺と武蔵五日市駅周辺の交流拠点や、東秋留駅周辺、武蔵引田駅周辺、武蔵増戸駅周辺の生活拠点、秋川高校跡地周辺の産業拠点を連携させ、軸状の都市機能集積を都市軸と位置付けます。

都市軸は、都市形成の土台となり、都市が発展し、利便性の向上を図る上で中心になる部分であることから、この軸を形成する都市基盤の整備や土地利用の誘導を進めます。

(2) 交通軸

本市を南北に貫く圏央道や国道411号（滝山街道）により、本市は周辺都市や首都圏の主要都市と連絡され、産業や交流の促進が期待されることから、これらの沿道一帯を交通軸として位置付け、広域交通ネットワークを生かした機能の集積や土地利用を図ります。

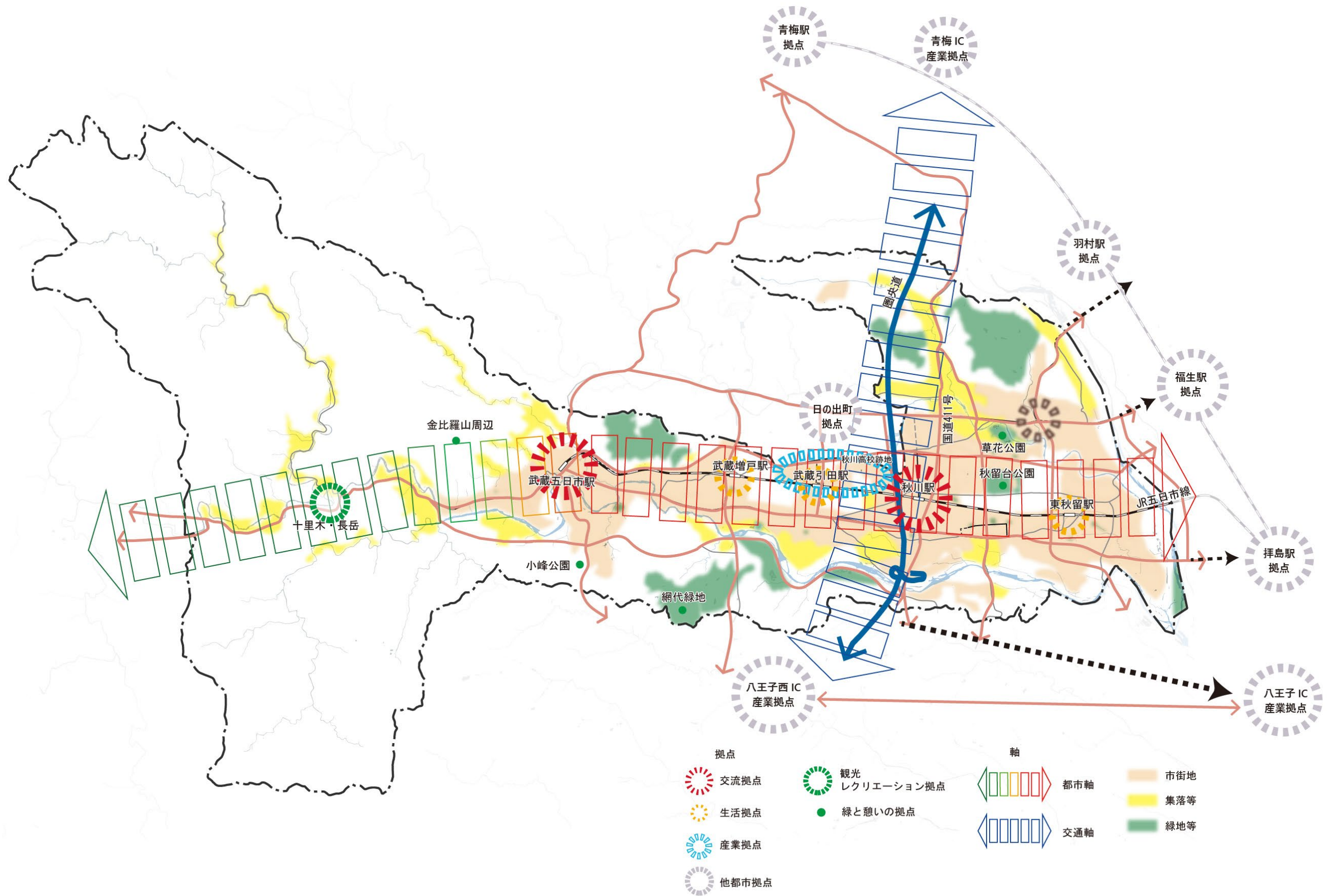
なお、上記の2軸を構成する道路網以外の主要な幹線道路は、これらの軸を補完し、各拠点へのアクセス等を強化することで、市内の交流を促進する道路ネットワークとして、整備を促進します。（具体的な路線は、交通体系整備の方針に記述）



都市軸（JR五日市線沿線）



交通軸（滝山街道）



■ 将来都市構造図

※他都市の拠点については各自治体のマスタープランに基づき記載

